

ざいちのち

まちやむら、そこに住む人びと(=ざいち)の、
知恵や生き方(=ち)から学び、実践する活動です。



京都大学
生存基盤科学研究ユニット
東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」・
「ベンガル湾縁辺における自然災害との共生を目指した在地のネットワーク型国際共同研究」

周防大島町久賀
石垣の棚田と庄地スライドウ

守山フィールドステーション

島あるきのススメ

周防大島文化交流センター 高木泰伸

周防大島文化交流センターは農林水産業の変遷に関する資料の収集とその活用を行う教育施設として2004年5月に開館、当町出身の民俗学者・宮本常一関係資料も所蔵している。安藤和雄さん(京大東南アジア研究所)は毎年、海外からの研究者や実践者を連れて来館されており、私は離島振興運動や民具収集活動をはじめ、宮本常一の実践活動についての説明をさせていただいている。

宮本は、高度経済成長期に農山漁村の生活知が急速に失われていくことに危機感を覚え、地域の人びとが一体となった民具収集を通じて生活知の見直しと保存を企図した。また老若男女が一緒になって地域の生活を見つめ直す作業をすることで、失いかけていた誇りを取り戻すことに繋がると考えていたという。収集された民具は町へ寄贈され、現在周防大島町教育委員会が管轄している民具だけでも5万点を超える。一見すれば当たり前に使われていたトウミヤクワ、モリヤスであるが、一つひとつに「モノ語り」があり、一ヶ所に集まれば土地の暮らしぶりが見えてくるから面白い。

海外からの研修生の方々も興味をもってくれ、なかには「我が国でも民具収集をしていき、資料館をつくりたい」といってくれる人もいます。私たちが民族学博物館で目にする諸国の民具をみるような視点で見てくれているのかもしれない。

去る平成24年12月16日(日)にも、安藤さん、辰己佳寿子さん(山口大学エクステンションセンター)らが、東南アジア研究所が招へいた Tshering Wangdi さん(Sherubtse College, ブータン)、Avakat Phasouysaingam さん(National University of Loa PDR, ラオス)、Htun Wai さん(Forest Resource Environment Development and Conservation Association, ミャンマー)の3名を連れて来館された。今回は館内をご案内した翌日に、宮本常一が昭和41年に撮影した景観写真を片手に現地を一緒にあるいた。

一般にはフィールドワークの一つとして行われる景観調査だが、センターでは地元の方を中心に景観の変遷から暮らしの変化を実感していただくように、またあるく過程で新たな島の課題と魅力を発見していただくように、「古写真の風景をあるく」として企画している。今回はその番外編であった。

さて、周防大島では昭和30年代にミカンへの作付転換が進み、集落の背後の畑地にはミカンの木々が植え

れ、さらに水田もミカン畑になっていった。現在も主要生産物はミカンだが、ミカン価格の低調さと後継者不足から耕作さ



竹が取り除かれつつあった石垣の放棄棚田での記念写真(右端:筆者、安藤撮影)

れなくなった土地が目立つようになり、現在の生産量は最盛期の1/4程度といわれる。かつて「耕して天に至る」と言われていた段々畑・棚田もモウソウチクに覆われ、平地部分では宅地になっているところも多い。

今回、棚田の近くまで行って現地をあるき、棚田の石組みを見てまわった。久賀の山手は嵩山からながれる水系を利用し水田がひらかれた。諸説あるが多くが江戸期の新田開発によるものだとされている。この棚田をひらいていく石積みの技術が広く普及し、久賀からは島外で活動する石工たちが多く排出された。現在「庄地のスライドウ」(スライドウ:タイトル写真中央の石垣の暗渠)は山口県の有形民俗文化財に指定されており、近年では地元NPOの人たちが耕作放棄された棚田を整備し桜を植えている。集落を俯瞰しただけではわからないが、モウソウチクが伐採され農地再生の試みや、イチジクの栽培や取水法などについてもみることができた。50年近く経った島の環境の変化を実感した3名の方からは「米を生産せずはどうして食料をまかなったのか?」とか、「山には植林はしているのか?」とか、館内説明の時以上に活発な質問が出て来たのが印象的だった。フィールドには、これから考えて行くべき課題や課題解決の糸口がたくさん転がっている。身近であるがゆえに見落としがちなお題や魅力、そういった「ざいちのち」をコーディネートしていけば、島全体がいわば一つの博物館ともなり得る。

以前、森本孝氏(元観光文化研究所所員)が宮本常一のこんなエピソードを話してくれた。「宮本先生は研究やレポートで悩んでいる若い人間がいると『まあ、あるいてみることにじゃ』といって旅に送り出すんですよ。そして、若者が帰ってきて興奮しながら旅の報告をすると、『そうじゃろお、面白かったじゃろお』ってニヤニヤと笑うんですね。」

まずは「あるく」こと、そこに実践へとつながっていく問題が眠っているのかもしれない。

日本の焼畑におけるカブ栽培（その1）

－山北地区山熊田の事例－

京都学園大学 鈴木玲治

戦後の日本の焼畑では、ソバ、アワ、ヒエなどの穀物栽培の減退に伴い、菜園的補助耕地として、小面積の焼畑におけるカブやダイコン栽培の占める相対的割合が増大していった。このような菜園的な焼畑も、高度経済成長に伴い衰退の一途をたどったが、カブについては、焼畑でなければ本来の色、形、風味、食感などがでないとして、焼畑での栽培を続ける農家が、北陸・東北の日本海側を中心に今なお残っている。

これらの地域の焼畑とカブ栽培の現況を知るため、2012年の10月中旬から下旬にかけて、新潟県村上市山北地区山熊田、山形県鶴岡市温海地区一霞、福井県福井市美山地区味見河内を訪れ、聞き取り調査を行った。ごく短期間での調査ではあったが、それぞれの地域でのカブ栽培の特徴や成立要因の違いがわかり、興味深かった。また、朽木FSでこれまで取り組んできた湖北余呉町での焼畑の課題と今後の展望を検討する上でも非常に有益であった。本ニューズレターでは、まず、山北地区山熊田の事例を紹介する。

山北地区山熊田の焼畑

－焼畑林業から地域活性化の手段へ－

山北地区の最も山奥に位置する山熊田集落では、2001年に地元の女性を中心に「生業の里企業組合」（以下、組合）が立ち上げられ、地域の伝統文化などを活かした生業にこだわり、山菜、餅加工品の提供や加工品の製造体験、シナ織りの製造販売などが行われてきた。これらの地域興しの一環として、焼畑による温海カブの栽培にも取り組んでいる。

山北地区では、造林の地拵えじこしらに焼畑を利用する「焼畑林業」が江戸時代後期から営まれてきた。林業の衰退と共に焼畑林業も減少していったが、現在でも、スギの皆伐跡地で焼畑によるカブ栽培が営まれる光景が山北地区全体で散見される。山熊田でも、2012年の組合の取り組みとして、集落の割山であるスギ植林地（50年生程度）約2haを皆伐し、その跡地で焼畑が営まれた（写真1）。6月にスギを伐採し、8月4日にスギの枝葉を利用した火入れが行われた。火入れ翌日に温海カブの種を播き、10月中旬から収穫を開始している。大きくなりすぎたカブは割れやすく商品価値が下がるため、間引きは必要最小限しか行わず、手頃なサイズになったものから順に収穫

し、雪が降る頃までは収穫を続ける。この方法では、間引きの手間が省けると共に、商品にならない間引き菜も最小限に留められるため、非常に合理的である。来年は、余呉町でもこのような収穫方法を取り入れていきたい。

組合総支配人の國井千寿子さんの話では、焼畑地としてはスギの皆伐跡地が理想だが、最近ではスギを伐採することが少なくなり、雑木林、ヨシやカヤの草地、田畑の土手でも焼畑をやっているとのことである。2012年は、カヤなどが優占する休耕地や畦畔、林道の建設残土を埋めた林道わきの土手などでも、個人の焼畑が営まれていたが、これらの土地でもカブの生育は良好であり（写真2）、伐採する植生や土壌の違いがカブの生育に与える影響は少ないように感じた。ただし、スギの皆伐跡地では雑草が少なく、除草はほとんど必要なかったのに対し、草地を焼いた焼畑では除草が必要であり、雑草抑制効果に対するスギ皆伐跡地のメリットはあると思われる。

組合では、8月の火入れ体験会や、10月下旬以降の赤カブ漬け体験会などを行っており、これらの焼畑体験会に年間300-500人が訪れるそうである。焼畑関係のイベントだけで年間200万円程度の売り上げがあるとのこと、非常に驚いた。赤カブ漬け体験会のように、収穫・加工の人手と参加費を同時に確保しながら、外部者との交流を促進できるイベントは、地域活性化を考える上で非常に有効であり、余呉町での焼畑の今後を考えていく上で、非常に参考になる。来年は、是非この赤カブ漬け体験に参加して、これほど多くの人を惹きつける秘訣を探してみたいと思う。

次回は、山形県鶴岡市温海地区一霞の焼畑について紹介する。



写真1：スギ皆伐跡地での温海カブの栽培。



写真2：休耕地横の土手でのカブ栽培。カブの生育は非常に良好だった。

筏がつなぐまち～保津川筏復活プロジェクトの意義を考える⑦

大阪商業大学 原田禎夫

ここでは、近年の流域における行政計画において、保津川筏復活プロジェクトがどのような影響をもたらしたのかについて考える。

従来この地域における各種審議会では、自治会など既存の各種団体などを主とした、いわゆる「あて職」の委員が多く選出され続け、一種の閉塞的な状況におかれていた。2000年ごろから、京都府や亀岡市は住民との協働をあらたな目標として掲げたものの、NPOなどからも積極的に審議会等への参加をめざすようになったものの、当初は十分な政策提案能力をもった専門性の高いNPOが少なく、という課題もあった。

このような中で、保津川の筏復活プロジェクトやアユモドキの保全活動といった、市民にとって“わかりやすい”シンボリックなプロジェクトを基軸とした市民と行政との協働によるプロジェクトの実施を通じて相互の信頼関係が醸成されたこともあり、審議会委員に京筏組を構成するNPOや船頭衆、研究者が選出されるようになった。

河川管理者である京都府が設置した、「地域戦略会議『明日の南丹地域ビジョン懇話会』」（2009年6月～2010年5月）には、京筏組の中心メンバーである河原林洋氏が委員となり、積極的に発言した¹。また、現在計画策定中の「保津川かわまちづくり計画」には、筆者をはじめ京筏組のメンバーが参加している。この計画では、保津川の特長として「古くから今日まで地域の暮らしと発展を支え続けてきた」ことが指摘され、その例として「農業利水、筏流し、保津川開削、舟運」が挙げられている²。そして、整備方針のひとつとして「保津川と人との関わりの歴史文化を伝える」ことが明記され、損傷の著しい水制

工の修復や、かつての筏の中継地であった「山本浜の復元」といった伝統的景観の修景事業が具体的な整備内容として挙げられることとなった。

基礎自治体である亀岡市では、第4次総合計画（2011～2020年度）が2010年度末に策定され、筆者もNPO代表という立場で審議会委員を務めている。この総合計画の「基本構想」では、「清らかな水、美しい保津川の流れ」などをこの地域のすぐれた資源と位置づけ、「河川の環境保全と景観行政の推進」がうたわれている。

この「基本構想」にもとづき、「前期基本計画」（2011～2015年度）では、今後実施する具体的な施策として「文化芸術・歴史文化」の章において「伝統的・文化的景観の保全」が挙げられ、行政と市民の協働により「国の重要文化的景観の指定に向けた取り組みとして、大堰川³流域の自然的景観および人々の営みによって培われた文化的景観の保全に努め」ることが示されたことが、従来の計画から大きく変わった点である。このほかにも、「アユモドキの保護増殖」の推進や、「生物多様性の維持増進、せせらぎや豊かな生態系の復活を図る「水辺環境の整備」が挙げられるとともに、全国の内陸部の自治体では初めて、「漂着ごみの発生抑制」に取り組むことが明記された⁴。

また、これらの施策の推進とあわせて「河川愛護団体の育成および活動支援」を進めることや、中小河川の改修でも「地域住民や市民団体」との協議・協働を進め、市民参画のもとで良好な景観や生物の生息環境へ配慮した河川改修の計画策定における市民参加を実現することが記されている。

- 1: 詳細は <http://www.pref.kyoto.jp/nantan/ki-kikaku/> を参照せよ。
- 2: 第2回保津川かわまちづくり検討委員会資料「かわまちづくりの目標、整備方針及び施策メニュー等について」<http://www.pref.kyoto.jp/nantan/do-kikaku/resources/1269320918816.pdf>
- 3: 保津川のこと。亀岡市域のうち、上流の半分程度では、大堰川と呼ばれる。上下流とも他にも大堰川と呼ぶ地域も多く、保津川や桂川よりも一般的な呼称として地域で認識されている。
- 4: (社)JEAN/全国クリーンアップ事務局へのヒアリングによる。



図1 水制工の復元案（出所：京都府南丹土木事務所ウェブサイト）



図2 保津川かわまちづくり推進協議会メンバーによる山本浜の現地視察（出所：京都府南丹土木事務所ウェブサイト）

催しのご案内

■ 京大大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所
京滋 FS 事業 第 51 回 実践型地域研究 定例研究会
日時 2012 年 11 月 30 日 (金) 17:00 ~ 19:00
場所 「もやいネット交流空間」守山駅前コスモ守山5番館
発表 鈴木玲治 (京都学園大学准教授・京都大学東南アジア
研究所特任准教授)

発表タイトル

「日本の焼畑におけるカブ栽培の現況 -山形・新潟・福井の事例-」
研究会終了後に懇親会を行います。

★以上の催し物への参加ご希望の方は、必ずご連絡ください。
京都大学 東南アジア研究所 実践型地域研究推進室
担当：安藤和雄 (ando@cseas.kyoto-u.ac.jp) まで。

「次世代に伝えよう農のある暮らし」 - 農村開発国際会議 草の根 棚田フォーラム イン 丹後 -

東南アジア研究所 中村均司

10月27日から29日まで京都府の丹後地域を会場に、丹後・棚田研究会と東南アジア研究所実践型地域研究推進室の主催で、また、京都府、総合地球環境学研究所、京都大学地域研究統合情報センター、高知大学、NPO 日本都市農村交流ネットワーク協会、棚田学会の後援をいただき、標記国際会議を開催しました。



写真1. 招へいブータン研究者の講演とワークショップ・まとめ

1日目は、『アジア農村の抱える問題と取組、大学の役割』をテーマに講演と報告が行われました。ジャミアン・チョダさん (王立ブータン大学講師) が「ブータンにおける移住と過疎の事例研究」、ジャミアン・ティンレイさんとソナム・チョデンさん (同大学研究員) が「農村開発における大学生の役割」、ニ・ニ・マウさん (ミャンマー NGO・ECCDI 副会長) が「生態系保全・コミュニティ開発イニシアティブの農村開発プログラム」について、それぞれ民族衣装を着て講演しました。続いて、氏原学さん (高知県大豊町怒田)、辰己佳寿子さん (山口大学エクステンションセンター) が中山間地域の商品化の試みや価値観などについて、地元・丹後の^{くわはら}榎原稔さん (京丹后市上山) が村への I ターンと荒廃棚田の整備・保全の経験を報告しました。

2日目は、宮津市上世屋の棚田、京丹后市袖志の棚田 (日本の棚田百選)、京丹后市市場の^{いちば}コウノトリを育む環境農業を視察しました。上世屋・^{こうりよく}合力の家では伝統民家復活の説明に対し、ミャンマーでも大黒柱に似た^{はり}梁があること、袖志では海と村と棚田の景観がアジアでも貴重であることなど、国際会議ならではの意見も。その後、丹後地域での活動報告が久美浜町農業センターを会場に行われました。井之本泰さん (合力の会) は、藤織り伝承 28 年間、合力の会 6 年間の活動から、続けることそのもの

が後継者づくりと結びました。野村重嘉さん (コウノトリと共生するまちづくりネットワーク京丹後) は、豊岡から 10 分間で行き来しているコウノトリの住める里づくりへの思いを、岡本毅さん (野間活性化グループ) は昭和 30 年代 1,200 人の住民が 190 人となっている現状の中で、細川ガラシャにちなんだ「天の恵みガラシャ米」の取組などを語りました。福満敏博さん (伊根と新井の千枚田を愛する会) は大阪・京都の米穀店主が中心になって 15 年間続けてきた棚田の応援団活動の内容と課題を報告。堀江亮平さん (袖志棚田保存会) は、都市部の学生やボランティアとの協働で休耕面積の 13% である 25 a を 3 年間で再生したことを報告し、その際、農村部の若者への声掛け、口コミで人の環が広がっていることなど内発的なアプローチも強調しました。

1 日目の課題提起 (日本の農村ではインフラが完備しているのに、過疎・高齢化が進んでいる、など) を参加者が共有し、2 日目の現地視察と活動報告で、課題の掘り下げ及び各種取組の到達段階と問題点が語られました。3 日目のワークショップとまとめは、海外・地域・都市・学生・行政・団体など各分野の参加者から多くの具体的な意見や提案が出されるとともに、それらは参加者と地域への貴重なエールとなりました。「ブータンは日本の過去であり、日本はブータンの未来である」、「農村の暮らしをトータルに学ぶ交流や取組みを」、「『大変だ』『辛い』などと言いながらも、どっこい頑張っている百姓根性」など。

丹後で初めて開催された草の根・国際会議。日本の農村の過疎問題や村での暮らしがアジアの問題としても語られ、現地の様々な活動が集落・地域やアジアを結ぶ貴重な取組であることを参加者一同が確認するフォーラムになりました。



写真2. 現地視察 (袖志の棚田と海)